

擬人法または擬物法

—あるいはラングとパロールの相剋—

坂 本 勉

「人々は自分の体に似せて神々を創造した。もし牛が神々を創造するとすれば、牛の姿を描いたであろう」 —クセノパネス

1 はじめに

「言語は形相であって実質ではない」(La langue est une forme et non une substance) というソシュールのひとことによって言語学は大きな転換を迎えることになった (Saussure, 1916)。言語学は、「実質ではないもの」への探求に向かうことになったのである。「意味するもの」(能記, signifiant) と「意味されるもの」(所記, signifié) との結びつきは恣意的であって、なんら必然性はない。例えば、[inu] という音の連続が「犬」という概念と結びつくのは偶然にすぎない。しかし、奇妙なことに、ひとたび [inu] が「犬」であり、[neko] が「猫」となってしまうと、そうした音と概念とは分ち難く結びつき、変更不可能となる。恣意的であったはずの結びつきが必然的なものへと変貌し、ひとつの大きな体系を作り上げていく。恣意的な結びつきの結果産み出された「実質ではないもの」が絶対的な強制力を持つようになる。

体系としてのラング (langue) は、個人の意思では変更できない強固な構造体である。しかし、実際に言語が使用されるのは、話し手 (書き手) と聞き手 (読み手) によって構成される場においてである。そして、そこで絶え間なく産み出されるパロール (parole) は常に個人的である。ラングは常にパロールの背後にあって、監視し、検閲し、自らの規範を押し付けようとする。パロールは常にラングからの締

め付けに反発し、その制約から逃れようとする。ラングとパロールは、相容れない異質的なものであると同時に、相互依存の関係にある。ラングという約束事がなければ、話し手と聞き手との相互了解は成立しない。パロールによる具現化がなければ、ラングは存在できない。

本稿では、言語によって異なった範疇 (category) の区別の仕方があることを、文法的性 (gender) と分類辞 (classifier) の例を検証しながら考察していく。異なった言語は異なった範疇の設定を行うであろう。これは、ラングとしての側面の考察となる。しかし、そうした範疇間を自由に行き来する手段のひとつとして擬人法 (personification) や擬物法 (objectification) がある。範疇の境界を乗り越えるための方法には人間の言語に共通のものがある。これはパロールとしての側面である。興味深いことに、擬人法 (擬物法) という観点から言語の範疇化を捉えなおしていく過程で、言語一般に共通する範疇化の側面が見えてくる。そしてまた、そうした範疇の間の転移関係という視点から見直すことによって擬人法 (擬物法) の本質が見えてくるのである。

2 文法的性による範疇化：二分法

現代英語では文法的性は表面上は区別されることはない。しかし、擬人法を用いる時には何らかの形で性の区別が行われなければならない。例えば、“The sun was shining in all his splendid beauty.” のような例に見られる性を、Curme (1931) は擬人的性 (gender of animation) と呼んでいる。以下で、この擬人的性の弁別に対する3つの影響について簡単に考察する。

まず第一は、擬人的性の決定に対する神話の影響である。ギリシャ神話やローマ神話の神々は、よく知られているように、人格神である。神は自らに似せて人間を創ったと言われるが、実際は、人間が自らに似せて神を創ったと言うべきなのだろう。これらの神々は、まさに、擬人神とでも呼ばれるべき存在なのだ。例えば、太陽神 Apollo (Phoebus) は、男性の神として登場するので、太陽 (Sun) それ自体も男性の擬人的性を持つことになる。同様に、月の神 Luna (Artemis) が女性であることから、月 (Moon) は女性の擬人的性を持つと考えられる。

次に挙げられるのが、語源的影響である。例えば、英語の ‘Rome’ は女性の擬人的

性を持つが、これはラテン語の 'Rōma' が女性の文法的性を持つからである。では、なぜ 'Rōma' が女性かというと、ラテン語では '-a' で終わる名詞は女性の文法的性を持つことが形態的に決定されているからである。同様に、'-us' で終わる名詞は男性、'-um' で終わるものは中性である。もちろん、こうした文法的性は形態的な条件のみによって一義的に決定できるものではなく、例外もある。例えば、'mālus' (リンゴの木) は '-us' で終わっているが女性である。

英語の擬人的性に語源的影響が見られることは確かなのだが、そのもとになった語の持つ文法的性の決定要因は明らかではない。例えば、英語において 'virture' (美德) が女性の擬人的性を持ち、'vice' (悪徳) が男性の擬人的性を持つのは、古フランス語の 'vertu' が女性、'vice' が男性の文法的性を持っていたからであると Curme は述べているが、なぜ古フランス語でそのような区別がなされていたのかは説明されていない。これはおそらく、その当時の言語共同体において、'vertu' と 'vice' が持っていた社会・道徳的な意味が、「男性—女性」という文法的性の対立にどのように組み込まれていたのかを考慮に入れなければならない問題であろう。

最後に問題となるのが、心理的影響である。Curme は、現代英語の擬人的性は心理的基盤 (psychological basis) に依存していると述べている。例えば、一般に、'magnificent, intense, horrible, etc.' なものが男性 (ocean, anger, death, etc.) であり、'tiny, tender, pretty, etc.' なものが女性 (cat, dove, pity, etc.) であると考えられている。日本においても、「男らしさ」対「女らしさ」(あるいは、「ますらをぶり」対「たおやめぶり」) という対概念がある。このような、文化的伝統としての「らしさ」というものは大体において一致する場合が多いとは言えるであろう。ただし、その「らしさ」に関する基準は時代・地域・個人等によって様々ではあるが。

文法的性の弁別には、「男性」対「女性」という二分法 (dichotomy) がその基盤にある。「中性」を区別する時も、「男性または女性」対「中性」という二分法に基づいている。文法的性を持つ言語がこうした二分法によって範疇分類を行っているとなれば、次節で述べる分類辞 (classifier) を持つ言語は、多項的分類法 (multichotomy) によって範疇分類を行っていると言えるだろう。

3 分類辞による範疇化：多項的分類法

日本語においては、モノが性の区別を持つ事はないので、「皿」が男性か女性かと悩む必要はない。しかし、皿は「一枚、二枚、、、」と教えなければならず、決して「一本、二本、、、」と数えてはならない。分類詞は、日本語ではモノを数える時に用いられるので、「助数詞」とも呼ばれる。分類辞の定義に関しては議論のあるところだが、ここでは、Allan (1977) の提示している次の基準に従うものとする。すなわち、「音形を持つ形態素 (morpheme) として出現し、かつ、関連する名詞の指示物 (referent) のある種の特徴を表している」ことである。

Lyons (1977) は分類辞のタイプを、実在体の「種類」を指す 'sortal' と実在体の「量」を示す 'mensural' とに分けた。例えば、'three whiskies' と言ったとき、これには、'three kinds of whisky' という 'sortal' な解釈と 'three quanta of whisky' という 'mensural' な解釈とがあると彼は述べている。もちろん、英語は分類辞言語 (classifier language) ではないけれども、'three sheets of paper' の例に見られる 'sheets' は分類辞と同じく、関連する名詞の 'individuation' と 'enumeration' の機能を持つ。

Allan (1977) では 'sortal' と 'mensural' の区別はなされず、共に 'numeral' と呼ばれる。Allan では、'numeral', 'concordial', 'predicate', 'inter-locative' の 4 種類が区別される。Bantu 系の言語に特徴的に見られる名詞のクラス (noun class) は、Allan では 'concordial classifier' と考えられている。すなわち、分類形式素 (classifying formative) が名詞だけでなく、動詞、形容詞、その他のものにも付加されるのがこのタイプの特徴である。例えば次の Swahili 語の例を見てみよう。ここでは、'vi-' が 'plural inanimate object' を示す分類辞で、それが様々な要素に付加されて繰り返し出てくる。

(1) Vi-su vi-dogo vi-wili hi-vi amba-vy-o ni-li-vi-nunua ni vi-kali sana.

vi+knife vi+small vi+two vi+this vi+which I+vi+bought are vi+sharp very
'These two small knives which I bought are very sharp.'

Athapaskan 系の言語に現れる分類的動詞 (classificatory verb) の例は、Allan で

は 'predicate classifier' とされる。つまり、その構造は、'classificatory verb stem + classifier' と考えられている。例えば、Navajo 語の 'béésò si-ʔá' は、'money perfect-lie (of round entity)' "A coin is lying (there)." と解釈されるが、ここでは、'si' が 'verb stem' で 'ʔá' は 'round entity' を示す分類辞とされる。'inter-locative classifier' は、名詞に義務的に付随する 'locative expression' の中に分類辞が埋め込まれている場合を指す。例えば、Toba 語では、実際に目の前に位置している物体が、'vertical' か 'horizontal' か 'three dimensional' かの区別が分類辞によって示されるという。

いずれの場合にせよ、重要なのは、関与する名詞の指示物が持つ何らかの認知可能な特徴によって分類辞の用法が決定されるということである。Lyons は、'sortal classifier' は 'entity' を個別化し、それらを類へとグループ化するための原理を供給または前提としており、この原理は多くの言語に共通のものであると考えている。この原理は、'person, animate, bird, etc.' といった潜在的指示物 (potential referents) の大まかなグループ化の意識に依っていると Lyons は述べるのだが、Allan はこれをさらに明確にして、次の 7 つの範疇によって分類がなされるとする。

(2) Seven Categories for classification

- (i) material (ii) shape (iii) consistency (iv) size (v) location (vi) arrangement (vii) quanta

もちろん、2 つ以上の範疇が分類に関与的な時もあるし、どの範疇に依るかも各言語によって異なる場合もある。しかしまた、地域的・系統的に異なった多くの言語において非常に似通った分類の仕方をする場合もある。こうした分類の類似性は、環境に対する反応の類似性を反映していると Allan は考えている。なぜならば、分類辞は知覚によるグループ化を反映するもの、つまり、知覚に対する言語的相関物 (linguistic correlate) だからであると彼は考えている。人間の知覚は、人間がひとつの生物として同一の種 (species) である限り、生理学的には類似したものにならざるを得ない。何らかの形で名詞をいくつかの類に分けることは、この現実世界に対する人間の認知的分類を言語的範疇に反映させることに他ならない。

Allan が言うように、どの分類辞を使用するかが、指示対象のある知覚可能な特徴

によって決定されるとしたら、いわゆる抽象名詞 (abstract noun) に対しては分類辞は用いられないと考えられる。日本語の例で考えてみても、抽象名詞に分類辞が用いられるとしても、それは具象名詞の場合とはかなり異なっている。日本語の抽象名詞には、「数詞+つ」という構成要素が付加されると考えることもできるが(「自由一ひと+つ」、「愛一ふた+つ」)、これは通常の表現としてはそれ程容認可能ではないと思われる。この「つ」を 'genaral or residual classifier' と呼んでも差し支えないかも知れないが、具象名詞がその指示物の特徴によっていくつかの類に分けられるのは本質的に異なっている(「皿一いち+まい」、「本一に+きつ」)。少なくとも日本語に関しては、抽象名詞は具象名詞と違って何らかの形式素によっていくつかの類に分けられることはない。知覚可能性に関して、抽象名詞と具象名詞には本質的な相違がある。第5・3節でも論じることになるが、具象と抽象は人間の認知過程において何らかの区別がなされていると考えられる。

さてここで、前節で述べた文法的性と分類辞の関連について少し考えてみたい。Dixon (1968 : 105) は、文法的性は名詞のクラスの特例な例とみなすことができ、この場合、2つまたは3つのみのクラスが性 (sex) との密接な意味的関連によって分類されると述べている。Allan (1977 : 290-1) も、文法的性が人間や他の高等動物の性的相違を反映したものであることは認めているが、それは意味的には空っぽ (empty) なものであり、'gender morpheme' は分類辞ではないと述べている。

現代の印欧諸語における文法的性の区別は確かに意味的基盤を欠いている。しかし、前節で考察した英語の擬人的性の場合のように、非常に大雑把ではあるが、何らかの意味的基準が文法的性の弁別に関与している、すなわち、人間の認知過程を反映していると考えられることもできる。文法的性の区別が意味的に全く「空っぽ」であると言い切ることはためらいがある。

文法的性と分類辞(あるいはそれによって示される「名詞のクラス」)を同様に扱うか、あるいは、別々のものとするかにはそれぞれ何らかの根拠はあるわけだが、共に十分に説得的であるとは言えない。いずれにせよ、何らかの形で範疇の分類が行われることに違いはない。ドイツ語では、'Buch' は中性の範疇に属するものであり、'*der Buch' や '*die Buch' ではなく、'das Buch' として用いられるべきなのである。日本語では、「*一羽の本」や「*一匹の本」ではなく「一冊の本」なのである。

体系としての言語（ラング）は強固な構造体であり、絶対的な強制力を持つ。我々には、言語によって切り分けられた範疇の枠を自由に取り外したり交換したりすることは許されていない。

ところが、言語にはこうした範疇の制約を破る力も備わっている。それが本稿で考察の対象とする擬人法や擬物法などの比喩的用法の持つ力である。では、こうした範疇境界の破壊としての擬人法について次節から考察していくことにする。

4 文法的構成による擬人法の型

ある表現を擬人法として解釈する場合、どの部分が擬人化されているのかを決定することがまず問題となる。そのためには、擬人化を行っている要素を探し出さなければならない。本節では、名詞・動詞・形容詞・副詞の4つの品詞において、それぞれ、どのように擬人化が行われるかを考察する。

4・1 名詞句擬人法

いわゆる擬人法とは、「人間以外のものを人間にたとえる」ことであると言われてきた。下の(3)では、人間ではない「コンピュータ」が人間である「秘書」として表現されている、典型的な擬人法の例である。なお、この節では、下線の施されたものが擬人化されるもの、波線の施されたものが擬人化する要素を示すものとする。

(3) The computer is a reliable secretary.

さてここでは、擬人化の作用を受けるのはコンピュータという名詞であり、擬人化するのは秘書という名詞であると解釈されている。しかし、コンピュータ自体が比喩的に「コンピュータのように頭脳明晰な人物」を指している可能性もある。この場合には「人」を「物」にたとえた擬物法（objectification）となる。

4・2 動詞句擬人法

通常、人間の動作や状態を示すと考えられている動詞が、人間以外のものを主語として取っている場合、その主語は擬人化されていると言えるだろう。

擬人法または擬物法

(4) The lily kissed the rock.

この型の擬人法は、選択制限違反 (selectional restriction) による比喩として説明されることもある。すなわち、動詞句に「主語が [+人間] という固有素性を持つ名詞句であること」を要求する選択素性が組み込まれており、その要求を満たしていないことから比喩として解釈されねばならないということである (cf. Levin, 1977)。われわれが漠然と感じていた比喩の存在を固有素性と選択素性という2つの素性を設定することによって、明示的に示した点で選択制限違反理論は価値のあるものだったが、これだけでは十分に説明しきれない部分が残る。なぜならば、動詞句比喩と呼ばれるものであっても、動詞が本来の意味で名詞が比喩的意味を担っていると考えることができるからである。つまり、動詞句比喩は名詞句比喩としての解釈も可能なのである。これは、どちらがどちらを比喩化するかという、方向性の問題である。この問題は本稿で特に論じたい点なので、第6節において詳しく考察する。

4・3 形容詞句擬人法

名詞を修飾する形容詞がその名詞を擬人化していると考えられる場合がある。

(5) He has an affectionate eraser.

ここでも、前節同様に二通りの解釈が可能である 'eraser' が擬人化されていると考えれば、'affectionate' は人間でないものに人間としての特性を付与していることになる。しかし、'eraser' それ自身が「実際の消しゴム」ではなく、「後始末をしてくれる人」を指す比喩であるとも解釈できる。この時、'affectionate' は、字義通りの「愛情のこまやかな」という意味を持つことになる。

4・4 副詞句擬人法

副詞が擬人化の働きをしていると考えられるものに次のような例がある。

(6) The car was running sadly.

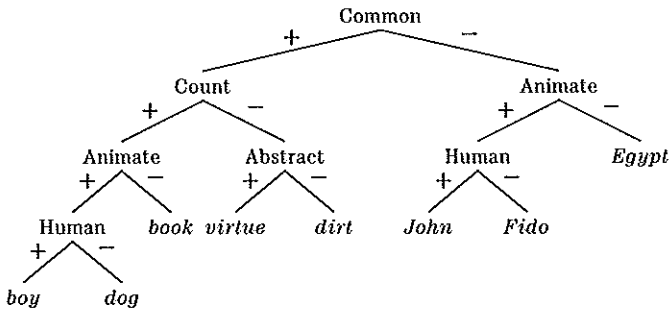
ここで、'car' が実際に「車」を指すのか、「車のようによく走るマラソンランナー」を指すのかによって解釈の仕方は異なってくる。このように、この節で挙げた例はすべて擬人法の例として挙げたのだが、すべてまた擬物法としての解釈も可能である。この二通り比喩解釈はどのようなメカニズムによって可能となっているのだろうか。この問題を解くために、範疇素性 (category feature) を設定し、それによって説明を試みてみよう。

5 範疇素性の同定と配列

5・1 従来の研究

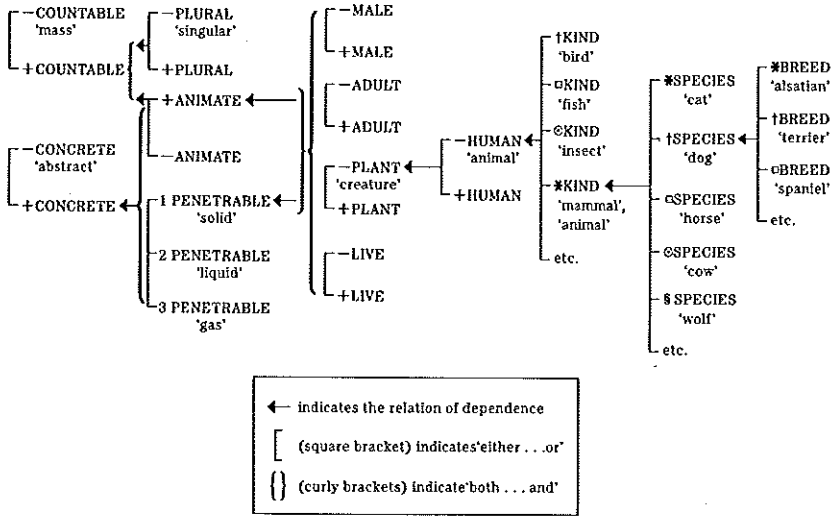
名詞の持つ意味素性 (semantic feature) を措定する試みは、従来、いくつかなされてきた。Chomsky (1965:83) では、次のような、二項対立的な素性付与の表が挙げられている。

表 1 : 二項対立的な素性関係表



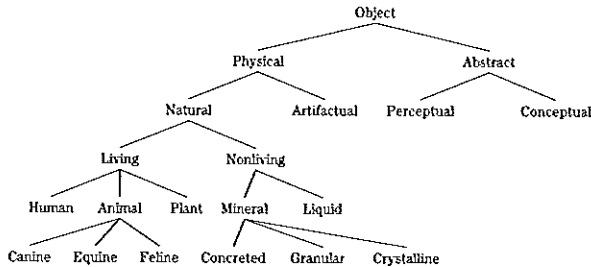
この表によって、'boy' は [+Human, +Animate, +Count, +Common] という 4 つの固有素性を持つことが示される。ところが、一見して明らかなように、[+/-Animate] と [+/-Human] が左右に重複して現れており、記述の経済性を欠いている。また、[+Human] であれば、必ず [+Animate] であるといった依存関係も示されていない。こうした問題点を解決するために、Leech (1974:121) は次のような依存関係に基づく表を提示した。

表 2 : 依存関係に基づく素性関係表



この表では、Chomsky の 2つの問題点は解決されているが、記述があまりにも複雑であり、ひとつひとつの名詞について恣意的な再記号化をおこなっているに過ぎないことになってしまう。例えば、「†BREED が †SPECIES に依存している」と述べることは、「terrier は dog の一種である」ということを言い直ただけである。Chomsky の簡潔性と Leech の依存関係性を取り入れた折衷案とでも言えるのが、次の Levin (1977 : 40) の表である。

表 3 : 上記 2つの折衷的な素性関係表



今まで概観した3つの表は、すべて、生物的・物理的な言語外の知識を暗黙のうちに取り入れている。しかし、人間の言語は、あくまでも人間が用いるものであることを考えるならば、名詞をいくつかの範疇に分類することも、人間を中心として考えた方がよいのではないだろうか。次節ではこの点について論じる。

5・2 「人間」対「生物」

「人間とそれ以外のもの」という区別が文法的な形でなされるのは、例えば、英語における、関係代名詞の 'who' と 'which' の対立である。

(7) That is the man who (*which) teaches us.

(8) That is the book which (*who) was written by him.

ここで、'who' と 'which' のどちらを使うかの判断は、対象となる名詞（いわゆる、「先行詞」）の指示物が人間の類に属するか否かによって決定されねばならない。

日本語においては、第3節で見たように、分類辞によって範疇の分類が多項的に行われる。さらに、「いる」と「ある」の対立によって、有生名詞と無生名詞との区別が行われる。

(9) 三人 (*匹、*冊) の男がいる (*ある)。

(10) 三匹 (*人、*冊) の猫がいる (*ある)。

(11) 三冊 (*人、*匹) の本がある (*いる)。

さらにまた、ある特定の類の生物にのみ用いられる動詞が存在する。例えば、'gallop' という動詞は主として馬に対して用いられるものであり、'The man galloped' と言えば、「その男は（馬が gallop するように）走った」という比喩的解釈が施されるであろう。同様に、「何が咲いたの」という問い掛けにおいて、「何」のところには「花」の類に属する名詞が期待されている。

以上、英語における人間とその他の区別、日本語における有生と無生の弁別、分類辞の使い分け、そして、特殊動詞の存在の4点から、「人間」と「生物」という範

範疇性を設定することが可能となる。

5・3 「具象」対「抽象」

Lees (1960) は、統語・意味的な観点から、具象名詞と抽象名詞を区別する。例えば、'taste, smell' などの感覚を示す動詞は具象名詞としか共起しない。そこで、'This apple tastes good.' という文は容認可能だが、'*This problem tastes good.' という文は認められない。同様に、'get, grow, turn' など状態の変化を示す動詞も抽象名詞とは共起できない。だから、'*His arrival gets dark.' は意味的に非文となる。

また、述部に用いられる形容詞にも、主部の名詞に応じて具象と抽象の区別が生じるから、具象形容詞 (afraid, careful, glad, green, etc.) と抽象形容詞 (mysterious, obvious, understandable, etc.) とを区別する必要がある。例えば、'The grass is green.' とは言えるが、'*The grass is obvious.' とは言えない。

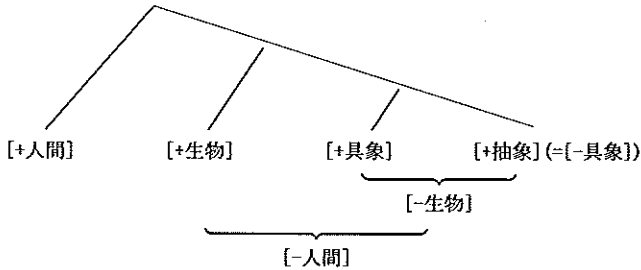
第3節で述べたように、日本語の具象名詞はその指示物の持つ特徴 (平たい、まるい、細長い、等) によっていくつかのグループに分けられるが、抽象名詞にはそのようなグループ化は見られない。それは、抽象名詞が本来的に数の概念とは無関係であり、また、個別化されることがないからであると考えられる。

上で述べたように、具象名詞と抽象名詞は、統語的・意味的に異なった振舞いをする。そこで、「具象」と「抽象」という範疇性を設定することが可能となる。

6 範疇間の転移関係

前節で、「人間」・「生物」・「具象」・「抽象」という4つの範疇性を設定した。ここで断っておかねばならないことは、「生物」とは人間以外の生物のことであり、「具象」とは人間と生物を除く具象物を指す。二項対立的な表し方をすれば、まず、すべての名詞は [+人間] と [-人間] とに分けられ、次に [-人間] は [+生物] と [-生物] との区別がなされ、最後に、[-生物] が [+具象] と [+抽象] (= [-具象]) とに分けられる。このことを表にすると次のようになる。

表4：「人間」を中心とした範疇分類



これらの範疇は人間を中心として右へ行く程人間から遠い存在となっている。これはあくまで人間を基準にした分類であるから、もちろん生物学的分類とは一致しない。また、この4つで必要かつ十分な範疇の分類が行われるわけでもないし、どの名詞がどの範疇に属するかを厳密に規定することも困難であろう。この分類は、従来、擬人法として扱われてきた比喩を明示的に説明するための道具だてである。そこで、たとえられる名詞（被喩辞 'tenor'）をアラビア数字で表して縦一列に並べ、たとえる名詞（喩辞 'vehicle'）をアルファベットで示して横一列に並べた表を作ってみると、次のようになる。

表5：比喩的転移の方向性

被喩辞 \ 喩辞	A人間	B生物	C具象	D抽象
1 人間	1→A	1→B	1→C	1→D
2 生物	2→A	2→B	2→C	2→D
3 具象	3→A	3→B	3→C	3→D
4 抽象	4→A	4→B	4→C	4→D

この表で、「1→A」、「2→B」、「3→C」、「4→D」の4つは同一範疇内での転移関係を示す。例えば、「あの社長は経済界の玉様だ」のように、同じ「人間」の範疇に属するもの間にも比喩は成立する。

さて、従来、擬人法と呼ばれてきたものは、この表によれば、転移関係を示す組

擬人法または擬物法

合わせのうちで、「2 → A」、「3 → A」、「4 → A」の3つのものになる。すなわち、以下の例のようなものである。

- (2) Lion is a king. 2 → A
(3) Butter is an excellent cook. 3 → A
(4) Pity is a friend. 4 → A

池上（1967：178）は、「Flowers smile on me」と「Happiness smiles on me」では、後者の方が前者よりも大胆な擬人化であると思われるが、それは、「happiness」という抽象的なものが、「flower」という具体的な存在よりも人間から遠い存在だと感じられるからであろうと述べている。このことは、表4と表5を見れば納得のいくことであろう。

擬人法は人間以外のものを人間にたとえる比喩法であるが、第4節で述べたように、その逆に、人間を人間以外のものにたとえる擬物法という比喩法が存在する。このことは、表5の最上列の転移関係によって明白に示されている。すなわち、次のような例である。

- (5) The man is a wolf. 1 → B
(6) The man is a rock. 1 → C
(7) The man is a power. 1 → D

表5によって、擬人法と擬物法が範疇の転移関係に関して、ちょうど対称的な関係にあることが分り、この二つの比喩法を包括的に説明することが可能となる。擬人法が、「人間」をモデルとして世界を解釈する方法であるならば、擬物法は「物」を通して人間を理解しようとする方法である。この二つは、言語によって切り取られた範疇の境界を越えて行き来する方法で、その方向が逆になっているだけである。人間の認知過程にはこの二通りの思考方法が共に存在している。そこで、この二通りの思考方法に対応した2通りの比喩の解釈について次節で論じる。

7 二通りの比喩解釈：擬人法と擬物法

ここで、4・2節で扱った 'The lily kissed the rock.' の例をもう一度とり上げる。この例文において、動詞 'kissed' が比喩化の働きを担っていると考えると、すなわち、動詞句比喩とみなすと、この文は擬人法の例となる。その解釈は大体、「ユリが（あたかも人間が口づけするかのよう）に岩の方へ倒れた (The lily bent toward the rock as if a person kissed.)」というふうになるだろう。この解釈の場合、「ユリ」と「岩」はあくまで現実世界の実在体である。「ユリ」と「岩」との間に起ったある状態の変化（ここでは「倒れた」としたが他の解釈も可能であろう）が 'kissed' という通常は人間を主語として取る動詞によって表現されていることによってこの文は比喩となっている。

ところが、名詞 (lily, rock) が比喩化の働きを行う名詞句比喩と考えると、この文は擬物法の例となる。おおよその解釈を与えると、「ユリ（のような美人）が岩（のような大男）に口づけをした」となるだろう。この解釈では、'kissed' は字義通りの意味を持ち、「ユリ」と「岩」がそれぞれ人間を指す比喩であると考えられる。以上のことをまとめてみると、

(8) Two ways of interpretation of 'The lily kissed the rock.'

(i) Personification: VP metaphor

The lily bent toward the rock as if a person kissed.

(ii) Objectification: NP metaphor

The beautiful woman (like a lily) kissed the big guy (like a rock).

Nunberg (1978) は、Byron の次の詩句を挙げて、その比喩的用法について論じている。

(9) The castled crag of Drachenfels

Frowns o'er the wide and winding

Rhine.

ここで、実際の「岩 (crag)」が、実際に「眉をひそめる (frowns)」と考えることもできるが、これは 'fairy tale' などに見られるもので、'normal belief' とは異なった世界の出来事になる。われわれの 'normal belief' の世界では、'crag' か 'frowns' かのどちらかが比喩的に用いられていると考えるのが普通である。つまり、名詞と動詞のどちらかが比喩化の働きを担っていると考えられる。Nunberg は、後続の詩句との関連から 'frowns' が比喩化の働きをしている動詞句比喩であると述べている。そして、この詩句を理解するためには、'we have only to reconstruct the Romantics' metaphysics and theory of poetry.' と言っている (ibid. : 163)。すなわち、Byron はこうした 'metaphysics' や 'theory' が 'normal belief' の体系の一部を構成しているかのように 'frowns' を用いているという訳である。結局、Nunberg は、Grice 流の 'conversational implicature' によって語用論的に比喩を説明しようとするわけだが、これではあまりにも当然のことを述べたにすぎないのであって、実際の比喩解釈のものにはたいして役に立たない。

Nunberg が挙げた Byron の詩句も、上述のような二通りの解釈が可能となる。すなわち、動詞が比喩化の働きをしている擬人法と考えれば、「岩が (あたかも人間が顔をしかめているかのように) 奇妙な形をしていた」となるだろう。また、名詞が比喩化の働きをしている擬物法とすれば、「岩 (のようにかつい男) が顔をしかめた」と解釈されるであろう。もちろん、こうした解釈は便宜的に与えられたものであって、必ずこのような解釈に至るとは限らない。また、これら二つの擬人法と擬物法の解釈のうち、文脈その他の情報によって、どちらか一方がよりありそうな解釈となることは十分考えられる。しかし、解釈の可能性としてはこの二通りがあることは認めなければならない。

Norrick (1981 : 216) は、動詞句比喩に、さらに 2 通りの解釈があることを、Wordsworth の次の詩句を挙げて主張している。

② The Pansy at my feet

Doth the same tale repeat:

まず第一は、素性拡張規則 (feature extension rule) の適用によって、[+人間]と

いう選択素性が 'repeat' から 'Pansy' に転移され、'Pansy' から [-人間] という固有素性が消去されると解釈される場合である。この場合、'Pansy' に擬人的 (anthropomorphic) 解釈が与えられ、'fairy tale reading' を受けることになると Norrick は述べている。しかし、Nunberg が言うように、'fairy tale' は現実世界とは異なった別の世界を創り上げているのであり、その世界の中では、実際の 'Pansy' が実際に 'repeat' するのである。ここで Norrick が述べるように拡張規則が適用されるとするならば、それは、外的世界を人間の世界に取り込むことによって解釈しようとする擬人法的認知過程を反映している。

第二の解釈は、彼の言う 'Metaphoric Principle 1' によって 'repeat' から [+人間] という素性を消去することにより、'repeat' が意味拡張 (meaning extension) を起こして 'signify' という意味を持つことになると考えることである。第一と第二の解釈の違いは、'repeat' から [+人間] という素性が転移されるか、消去されるかだけである。いずれにしても、'repeat' から [+人間] という素性が失われるわけだから、'repeat' には新たな意味解釈が施されなければならないことに変わりはない。

Norrick は擬人法を 'fairy tale reading' であると考えているが、これでは擬人法の本質が見えてこない。擬人法とは、あくまで、人間以外のものを人間として解釈する認識方法なのである。「として」解釈するということは、実際には「でない」ことを前提としている。よってここでは、'Pansy' が実際に 'repeat' したのではなく、あたかも人間が 'repeat' したかのように 'signify' したと解釈されるべきである。第一の解釈においても第二の解釈においても、'Pansy' はあくまで現実世界の 'Pansy' なのである。本稿の論旨に従うなら、ここでの第一と第二の解釈を合わせて擬人法としての解釈がなされるべきである。そしてより重要な別の解釈は、この詩句の擬物法的解釈なのである。すなわち、'repeat' が字義的な意味を持っており、'Pansy' が比喩的に人間 (おそらくは恋人) を指すと解釈される場合である。例えば、次の Robert Burns の詩句を考えてみよう。

②) O, my love's like a red, red rose.

ここでは明らかに人間 (my love) が人間以外のもの (rose) にたとえられた擬物法

となっている。一般に女性は花にたとえられることが多いようだが、Wordsworthの詩句においても、'Pansy'がある女性を指していると解釈することに何の不都合もない筈である。

Norrickの挙げているWordsworthの詩句から次の若山牧水の短歌が連想される。

効かたわらに 秋草の花 語るらく 滅びしものは 美しきかな

ここでも、「秋草の花」が実際の花であって、「語る」によって擬人化されているという解釈（花が告げる・知らせる？）と、「秋草の花」は誰か人間を擬物化したものであり、「語る」は字義通りに解釈される場合とが考えられる。

8 おわりに

従来、「人間以外のものを人間にたとえる」という漠然とした定義を与えられていた擬人法をより明確に説明するために4つの範疇を設定した。この設定にあたっては、統語的・意味的裏付けを明らかにした。これらの範疇を「人間」を中心とした順に配列し、相互の転移関係を見ることによって、擬人法と擬物法との対称的な性格が明らかとなった。また、言語表現のどの部分が比喩化の働きを担っているのかを文法的に明らかにし、かつ、擬人法・擬物法との関連をつけることによって、比喩解釈の二通りの可能性が示された。

言語は世界を見る窓であると言われる。四角い窓の家に住む人はこの世は四角いものだと思い、丸窓の家の住人は世界とは丸いものだと思っている。言語が我々の経験様式（文化や思考）を形作るというわけである。こうした考えは、言語学においては、「サピア・ウォーフの仮説」（Sapir-Whorf Hypothesis）として知られている。ただし、これは本人たちが命名したものではない（Sapir, 1949; Whorf, 1956）。この仮説には強い解釈と弱い解釈の2つがある。ひとつは、非言語的な思考を認めず、「思考とは言語である」という言語的決定論（linguistic determinism）である。もうひとつは非言語的な思考の存在を認めた上で、「思考が言語によって一部影響を受ける」という言語的相対論（linguistic relativism）である。言語によって世界が作り出されるとする言語決定論を極限まで押し進めると、言語がなければ世界がない

ということになる。ものの見え方というのは言語によって変わり、人間は言語を通して世界を認識しているのだから、異なった言語を話す者同士が分かり合えることはなく、言語間の翻訳などは全く不可能となる。一方、言語相対論をどんどん弱めていくと、現実世界が相対的なのではなく、言語によって「切り取り方」に多少の違いがあるだけだということになる。ここから一步（実は大きな一步なのだが）踏み出せば、多様に見える言語の背後に普遍的な言語の姿が見えてくる。普遍論的な言語観に立つチョムスキーは、どの言語にも対応するような言語獲得能力が遺伝的に備わっているという言語生得説を唱えた。つまり、人間は生まれながらにして言語の基本構造（これを「普遍文法 (Universal Grammar)」と呼ぶ）を身につけていると考えるのである。よって、異なる言語の話し手の間での了解可能性や、異言語間の翻訳可能性も保証される。しかし実際には、外国語を用いて自分の意図を伝えることは非常に困難であるし、翻訳不可能な概念の存在に悩まされることもしばしばである。そこで、人間の言語には普遍的な側面もあるし、ある程度はそれぞれに固有な側面もあると考えるのが常識的なところであろう。しかし、こうした立場は常識的であるが故に、我々の言語観に再考を迫るようなことはない。

本稿では、言語構造にみられる差異が実際に世界を認識（知覚し、概念化）するやり方の違いと結びつくということを否定しない。世界を切り取るとは、言語によって固有の範疇化・概念化を行うことである。ラングとしての言語は、そうした範疇化・概念化の結果に生まれた体系である。しかし、異なった言語の背後には一般的な範疇化の原則があり、パロールとしての言語はそこを突き崩すことによって、ラングによって規制された世界観に変革を迫るのである。表面上の瑣末な相違、例えば、イヌイット（エスキモー）語では雪を表す言葉が30いくつもあるとか、アラビア語には様々な状態にある馬を異なった言葉で表現するとかいった類のことは、全く本質的なことではない。ラングによって押し付けられた世界観を覆すためには、その言語が世界を切り分ける、その切り分け方の最も本質的な部分を見極めて、そこを突破しなければならない。言語が「ヒト」と「モノ」を切り分けて範疇化する時、パロールはその境界をやすやすと越えてみせることによって、ラングによってがんじがらめになった世界の見え方に変革を迫るのである。これが擬人法の、そして、擬物法の本質である。

<参考文献>

- Allan, K. (1977) "Classifiers." *Language* 53, 285-311.
- Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Curme, G. O. (1931) *Syntax*. Boston: D.C. Heath.
- Dixon, R. M. W. (1968) "Noun Classes." *Lingua* 21, 104-25.
- Leech, G. (1974) *Semantics*. Harmondsworth: Penguin.
- Lees, R. B. (1960) *The Grammar of English Nominalizations*. Bloomington: Research Center in Anthropology, Folklore, and Linguistics, Indiana University.
- Levin, S. R. (1977) *The Semantics of Metaphor*. Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Lyons, J. (1977) *Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Norrick, N. R. (1981) *Semiotic Principles in Semantic Theory*. Amsterdam: John Benjamins.
- Nunberg, G. D. (1978) *The Pragmatics of Reference*. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- Saussure, Ferdinand de (1916) *Cours de Linguistique Générale*. Paris: Payot. 小林英夫 (訳) 1949, 1972 (改訂版) 『一般言語学講義』 岩波書店
- Sapir, E. (1949) *Culture, Language and Personality*. D. Mandelbaum (ed.), Berkeley: University of California Press.
- Whorf, B. L. (1956) *Language, Thought and Reality*. J. B. Carroll (ed.), Cambridge, Mass: MIT Press.
- 池上嘉彦 (1967) 『英詩の文法』 研究社